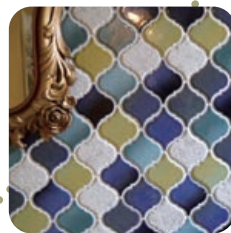


みのの EDO

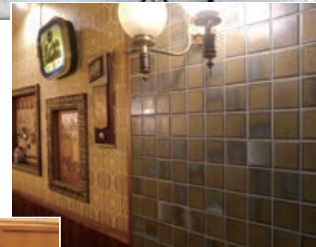
東京 笠原情報誌 MAIL版

ちょっとした遊び心と アナログ感を添えて ～大阪・バトングループのタイル使い

大阪市、和歌山市でカフェやパン店など9店舗を展開するバトングループ。いずれの店舗も様々なタイルを使用。色彩豊かでレトロテイストの空間が人気を集めている。代表兼デザイナーの谷野恵子さんに店舗作りについて伺った。



カフェ トキオナ
2階建てのファサード全面がタイル張り。一見、元々の古いタイル?と思いきや、新しいもの。他店舗を含め、ショーケースやカウンターの多くが曲面を用いた作り(写真下)。



梅田からほど近い天満に、バトングループの6店舗が集まる通りがある。古いビルがマンションへ建て替わる中、この一角はランチに、パンやお菓子を買にと、お店を訪れる人でにぎわっていた。

バトンは、2010年に雑貨屋からスタートしました。今でこそお店も増えましたが、私たちがお店を始めた頃は古いビルしかないような場所でした。雨の日や寒い日は人通りも少なく大変でしたね。

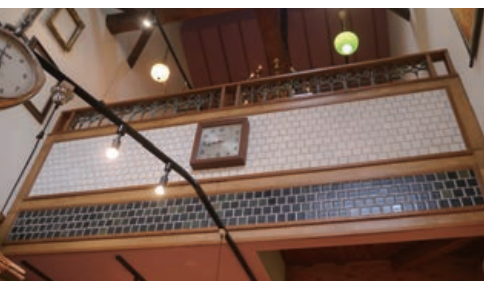
タイルを使い始めたのは2012年にオープンした「カフェ トキオナ」からです。現在の「トキオナ」は2019年に移転した店舗ですが、最初は天満のビルの1階にあり、外壁が元々タイル張りでした。店内にもタイルをちょこちょこ使うようになって、今はすべての店舗で使っています。

以前から古いビルが好きで、タイルも可愛いなと思っていました。タイルはアクセントになるような使い方をしています。

現在の「トキオナ」は、天満から徒歩5分ほどで行ける大阪天満宮近くの商店街にある。ゲストハウスとして使われていた町家を大幅にリノベーション。多種多様なタイルが彩る店内にはアンティークの雑貨も飾られ、楽しさに溢れている。

バトン全体のコンセプトは、レトロテイストとノスタルジック。あとは「海外に憧れた日本」。日本と海外、両方のテイストを入れています。これはどの店も共通です。

お店ごとのコンセプトもあって、「トキオナ」はノスタルジックに加えて、好きなものをぎゅぎゅっと詰め込んだおもちゃ箱をイメージしています。昭和レトロ



入り口付近は2階まで吹き抜けになっており、見上げると壁がタイルで彩られていた。



代表兼デザイナーの谷野恵子さん。コーヒーカウンター「セカンドバナナ」にて。



コバトパーラー

初の和歌山店舗。古い建物をリノベーションしたレトロな店構えが目を引く。客席を設けた2階がモザイク床。1階のカウンターにも同じ柄が施されている。



があれば、アンティークやヴィンテージ、現行品もある。お店に合うものをごちゃっと混ぜ合わせたような空間にしています。

タイルのデザインは他と勝手が違う

和歌山の「コバトパーラー」「コバトベイクファクトリー」、大阪の「コバトストア」の3店舗は、床全面のモザイクタイルのパターン張りが印象的だ。この柄のデザインも谷野さんが手掛けている。

「コバトパーラー」は、元は雨漏りしているようなボロボロの古い建物だったんです。小さなお店ですが、いい感じに仕上がったのではないかと考えています。みなさん「床が可愛い」と言ってよく写真を撮ってくださいます。床全面という大きな面積なのでインパクトがあるのではないかと思います。

床のモザイクの柄は、タイル商社のサイト上にあるシミュレーターを使ってデザインしています。タイルの種類や色、目地の色を選んでシミュレーションでき、柄をリピートしたバージョンを見られるので、イメージがわ



コバトパーラーでいただけるベーグルサンド。



撮影時に女性客が来店。店内を見渡して「タイルなのね」とにっこり。カウンターのタイルに触れて「きれいな色ね～」と目を細めていた。

コバトベイクファクトリー
「コバトパーラー」の向かいに建つベーグルと焼き菓子の専門店。

きやすいです。作った柄は、写真にはめこんで確認します。

外壁に使う場合も、タイルの写真をPhotoshopで配置して、イメージを作っています。

タイルは、他の紙ものとはデザインの勝手が違うという。「床全面に張ったイメージがなかなかかわかないですね」。この難しさが、タイルが使われにくい理由の一つとも思える。

費用の面もありますけどね。けっこう高いなと思いますが、その分のインパクトはあるし、キャッチーだと思います。

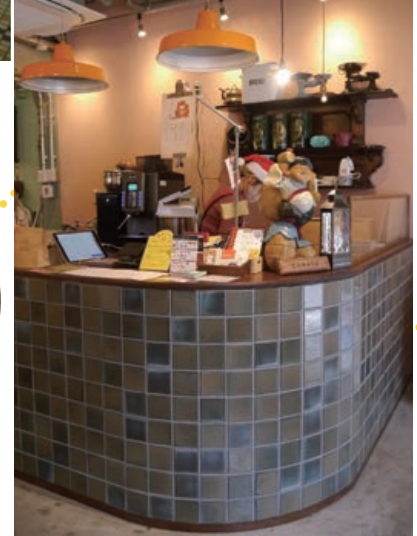
ほかに難点をいえば、雨の日にすべりやすいことでしょうか。スタッフには「こまめにモップをかけて」と伝えていますが、「マットを敷いていいですか」と聞かれますが、それはダサいからやめと。「すべりやすくなっているので、気をつけてくださいね」と声をかけてもらっています。



コバトストア
手土産専門店。ショーウィンドウは海外のテーラーをイメージし、重厚感のある作り。アクセントにタイルを施す。



入り口から内部へと続く部分は、レッドカーペットを模したモザイク柄。



コバトスタンド
どら焼きとコーヒーを提供するお店。「コバトストア」と内部でつながる。カウンターのタイルは、「トキオナ」の外装と同じもの。

隙がないデザインは面白くない

タイルの選び方や、望むことについてお聞きした。

好きなタイルがいくつかあります。「トキオナ」の外壁の緑色のタイルは、「コバトスタンド」のカウンターにも使っています。あと、六角形のモザイクタイルもよく使います。

最近は味のあるタイルが少ないなと思います。スタイリッシュなタイルは多いですが、私たちは古いビルに張ってあるようなタイルが好きなので……。それと、外装用タイルで可愛いものがあれば、嬉しいですね。京都のカフェ・アンデパンダンでは、たくさんタイルが使われていて、素敵だと思いました。鮮やかな赤、釉薬のもやっとした色。なかなか今はこんな色のタイルはないですね。

銀座ライオンのピアホールは、全体に色々なタイルが張ってあって圧巻です。派手さはないですけど、おしゃれだなと思います。



お気に入りの店からバトングループが目指す空間も伝わってくる。最後にお店作りで大切にしていることを教えていただいた。

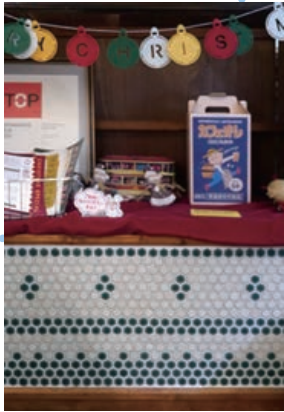
お店を作ったり、何かをデザインしたりするとき、いつも話しているのは、隙がないデザインは面白くないということ。お店の敷居も高く見えてしまうので、“ちょいダサ”を心がけています。

だからといって、もちろん安っぽいお店にはしたくない。おしゃれだけど、入りやすいお店を目指しています。なにかアナログな感じ、ちょっとした遊び心を取り入れること。お店作りでは、とくにそれを意識しています。

取材後、近所にタイルを多用した新しそうなお店を発見。「バトンに触発されて」…とは分からないが、お店を訪れたことをきっかけに、タイルに興味をもった人もいるに違いない。



コバトパン工場
コッペパン専門店。
写真左は隣接するコーヒーカーンター。



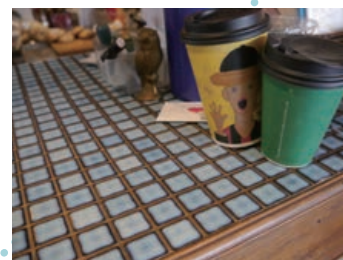
CHECK!!

タイル発見!

「今はすべての店舗で使っています」との言葉を確認するべく(?)、各店舗を巡りました。



グループの3店舗が入るビルの外観は、元々タイル張り。1階正面は「ニューヨーク チキン グリル」、右手に「コバトパン工場」、2階に「セカンドバナナ」が入る。



コバト836
ベーグルサンドと焼き菓子の専門店。写真左上は、円柱にぐるりとタイルを張った「ベーグルタワー」。

第3回 タイルと

日々街を探索し、面白いと思ったモノの
観察・調査を続ける林丈二さん。
タイルもその中の一つです。
今回は街中で出会った「銭湯のタイル絵」について
綴っていただきました。

「銭湯のタイル絵」との30年

林 丈二

著述家・イラストレーター

銭湯が姿を消していく中で

街歩き道の草の楽しみの一つは、自分の子供のころには当たり前に見かけたものや、あるいは気づかなかったけれど、「何だか懐かしい」と感じるものに出合えること。ちょっと立ち止まってから、一枚パシリと、カメラのシャッターを切っておきます。もう二度と出合わないかもしれないので……。

そういった感覚で、最も印象深い「銭湯のタイル絵（絵タイル）」との出会いを一つ選んでみました。

戦後、特に「東京の銭湯」の多くが、有名な「富士山のペンキ絵」や、「タイル絵」というもので装飾されたといわれています。とはいえ、子供のころ、僕の住んでいた荒川区の近所の銭湯に、「タイル絵」があったという記憶はまったくありません。

ところが、銭湯が次々と姿を消していく時代となり、これは、意識して記録しておかねばと思ってから、「東京の銭湯の壁面」が「タイル絵」で装飾されているのに、初めて気づきました。

駐車場の「大パノラマ図」

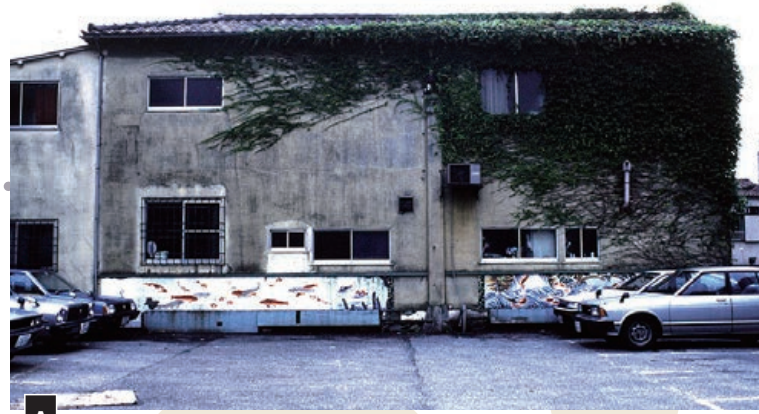
1986年に結成された路上観察学会の合宿の際、付近に銭湯があれば、必ず入り、皆で「タイル絵」を鑑賞、その絵柄、作者などをチェックしていました。

1986年9月、台東区を探索中、駐車場の壁面に、どう見ても銭湯のタイル絵であろう「大パノラマ図」に出くわします。(写真A)

向かって右側は、荒々しい感じなので「男湯」、左は「女湯」(写真B)でしょう。男湯側の半分は駐車中の車が隣接していて、写真がうまく撮れません。

女湯の一部は情景が変わって、「オシドリ」(写真C)がいる側には「子供湯」が区切られていたのかもしれない。

この女湯のタイル壁面の左端には、「章仙」の作者名、さらに「九谷」「鈴木堂」(写真D)とあり、これは金



A 駐車場の「大パノラマ図」



B 女湯の
タイル絵



C 女湯「オシドリ」



D 女湯「作者名と工房名」

1986年
9月



沢市にある工房のサインです。

3年後、1989年10月、たまたま、この近くまで来たので、もうないだろうと思って寄ったら、まだタイル絵はそのまま残っていました。このときも、男湯の方は車がいましたが、何とか少しでも、狭い空間から、杭にとまるカワセミ(写真E)、川面を飛ぶカワセミ(写真F)を撮り、「章仙」のサイン(写真G)も撮りましたが、ずいぶん「章仙」の書体が違います。つまり、女湯のタイル絵と同じ時期に描いたのではないという

のが、どうい理由なのかわかりませんが、興味がわきます。

めったにこの辺りに来ることもないのに、さらにその3年後、1992年4月19日、もう無いかと寄ってみたら、まだありました。今度は、ちゃんと「男湯」のタイルも全面が見えます(写真H)。

さらに5年後、1997年10月30日、もうあるわけない、と思っていたら、まだあったのです。その時は、背後の壁面にツタが生い茂り、タイル絵の鯉(写真I)も隠れてしまって、それなりの「風情」まで漂っていました。

鯉たちとの再会

近くに来ると、どうしても思い出します。何年後だったか、もう忘れるぐらいになって、今度は、確かこの辺りと、探してもわからなくなるほどに、タイル絵の辺りには新しい建物が並んでいました。

それから、まったく頭の中に、そういうことがあったことさえも忘れた何年か後、初めてタイル絵に出合ってからほぼ30年、あれがあったと思しき現場から少し離れた住宅の壁面に、

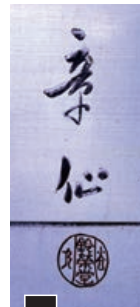
「あれ？ 見たことがあるような……」

あの「タイル絵」の一部「女湯の鯉かも」、ちょっと傷ついているようでしたが、元気に群れを成して泳いでいたのです(写真J)。

これはこれは、もしかして、このお宅の方は、あの銭湯に通っていた方かも、だとすれば、私よりもずっとあの「タイル絵の鯉たち」が気になっていた……のかも。たまたま、あの辺りの再開発のときに通りかかり、「何とかこれだけでも」ということで、あわやのところで救出したのか……というようなことが帰り道の間、頭の中でぐるぐると巡っていました。

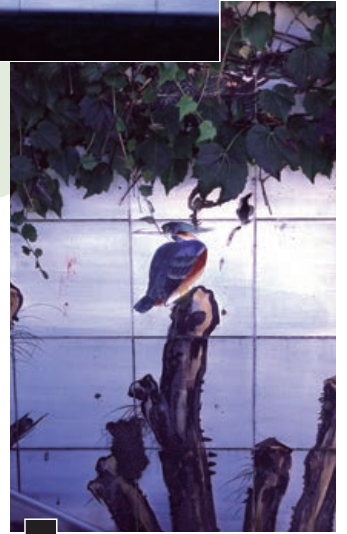


F 男湯
「川面を飛ぶカワセミ」



G 男湯「作者名と工房名」

1989年
10月



E 男湯「杭にとまるカワセミ」



H 男湯のタイル絵

1992年
4月



I ツタの葉に隠れる「鯉」

1997年
10月



J 住宅の壁面に現れた「鯉」

2016年
7月

林 文二(はやし・じょうじ)

1947年、東京・練馬区生まれ。著述家。イラストレーター。明治文化研究家。1986年に赤瀬川原平氏らと路上観察学会を設立。「マンホールのふた」「街歩き」「絵葉書」「明治の文化」など、幅広いテーマで執筆。近著にZINE『あれも地図、これも地図。』など。